

● 議題

1. 申請時の指標への対応状況について
2. APの事業期間延長と調書の提出について
3. AP Webサイトへの掲載について
4. 平成27年度実績について
5. 特別任命教員の任用について
6. フォローアップに係る実施状況報告書の提出について
7. APニューズレターについて
8. 予算執行状況について
9. 成果報告書について
10. 今年度の実施計画について
 - (1) 学内AP
 - (2) 国内外調査
 - (3) 内部評価委員会・外部評価委員会
 - (4) シンポジウム
 - (5) 交渉学ワークショップ
 - (6) 交渉学科目及びクリティカルシンキングに関わる科目の開講
 - (7) 交渉学、アクティブ・ラーニング型科目の授業実践に関する学習会（FD・SD）、交渉学コンテンツを作成する研究会の開催
 - (8) 交渉学・クリティカルシンキングの要素を取り入れた授業におけるクラスループブリックの試行的運用
 - (9) 学生スタッフ育成プログラムの運用・リーダーシップを持つ学生養成の効果測定のための指標構築
 - (10) 学修コンシェルジュ研修プログラムの実施
 - (11) 各学部における学びのプロセスの検討
 - (12) 初年次教育に関する学士課程ごとのメタループブリックの作成
 - (13) クラスループブリックの普及
 - (14) 卒業生調査の検討
 - (15) パネル調査の実施
 - (16) ループブリック評価と教学IRの活用についてイベントの開催

第5回交渉学ワークショップ「win-winの関係づくりの身体化」を開催

日時：2016年6月18日(土)10:00～16:00

場所：千里山キャンパス 第2学舎1号館 B401、B301、B302、B304、B305

参加者：前半の部45名、後半の部47名

報告者：山本 敏幸(教育推進部 教授)

第5回交渉学ワークショップを2016年6月18日に行いました。前半の部では、「win-winの関係づくりの身体化」と題して、LA（ラーニング・アシスタント）や交渉学・クリティカルシンキングを学ぶ学生たちが自分たちの学びの成果をミニセッション形式で交渉学を学ぶ学生・社会人たちに共有しました。

学生リーダーによる交渉学・クリティカルシンキングミニセッション

〔プログラム紹介〕

A 増田優奈・重山航哉 「ねごちやれ!!おとぎの国の交渉!!」
「桃太郎さん!きびだんごひとつくださいな」「いいよ!免道法についてきてくれるならね」「わーい!ーちよっと待って!これって本当にWin-Winなの?ここでは、桃太郎と犬の交渉シーンから、《Mission(交渉の目的・目標)》を定義したワークを行います。Missionを明確にして、このお話をハッピーエンドに導きましょう!

B1 安井明日香・谷所聖仁 「熊本の地震の支援についてクリティカルシンキングしよう!」
昨今の社会でもとても重要視されている「クリティカルシンキング」という考え方をご存知ですか?簡単に言うとなし合って物事を深く考えることです。このセッションで熊本の震災支援を題材に深く考える技術を実践してみましょう!!

B2 花田 潤・前田みのり・山原秀介 「アイスブレイクズ:1回生でつくる交渉学」
みなさん、初対面の人とどう接すればいいかわからず、なかなか打ち解けられない経験はありませんか?そんなときにあなたの助けとなるのがアイスブレイクです。私たちアイスブレイクズは一回生で結成されたチームで、いろいろなアイスブレイクを用意しました。誰でも楽しく参加できるので是非参加してください。

B3 迫 琢磨 「人の人生をクリティカルシンキング」
人の人生は選択の連続です。このセッションではグループごとに人間を作ってもらいます。そのグループごとの人間を接触させたときに起こることをクリティカルシンキングします。自らの経験・想像力・考える力をうまく使ってみましょう!!

C 池澤智也 「身近な情報をクリティカルシンキングしてみよう!」
私たちは様々な情報に触れることができます。様々な情報が身近になり便利になった反面、偽りの情報もあります。情報を鵜呑みにするのではなく、クリティカルシンキングで根拠を突き止め、「情報」を違う角度から見とってみませんか。

D 大早優美 「学生×社会人 交渉学で起こすパラダイムシフト」
【学生×社会人で交渉学にチャレンジ!】「相手に上手く伝えられない」「相手の考えがうまく分からない」このような悩みを抱えたことはありませんか?親子ゲンカから、組織内のコミュニケーション問題の解決まで、実は、日々の様々な場面で交渉学は実践できます!今すぐ試してみたいようなスキルを60分間で体験してみませんか?

E 瀧内記・糸井美咲+道手門学院大学生 「大学生活におけるwin-winな関係」
このセッションでは、学生や社会人分け隔てなく、あるテーマについて自由に意見交換をしてもらいます。いろんな立場からの意見を聞き、また自分の意見を話すことで、win-winな関係を築くヒントをいっしょに見つけ出しましょう!

F 金井采夏・小南孝頼・北浦 駿(道手門学院大学) 「交渉学を体験してみよう!-交渉学の世界へバンジージャンプ!-」
みなさん!交渉についてどんなイメージを抱いていますか?「難しそう!」「普段は使わない!」そのようなイメージがあるのではないでしょうか?私たち道手門学生がそのイメージを180度変えて見せましょう!!今回のワークショップを通じて交渉学の世界にご案内いたします!!

〔スケジュール〕

セッション	時間	B301	B302	B304	B305
(1)	10:15-11:15	A	B1	C	E
(2)	11:30-12:30	A	B2	D	F
(3)	13:30-14:30	C	B3	D	F

〔会場案内図〕

後半の部では、交渉学学生リーダーのための研修「win-winの関係づくりの追求」と題して、交渉学リーダーをめざす学生たち、交渉学教材コンテンツに関心のある学生、一般社会人を対象にフレームワークを使った交渉学コンテンツの作成から活用までをグループワーク形式で行いました。

学生セッションの部の写真



後半のワークの様子



「第6回交渉学ワークショップ」を開催

日 時：2016年8月6日
 場 所：関西大学 東京センター
 参加者：24名
 報告者：山本 敏幸(教育推進部 教授)

2016年8月6日、東京センターにて「交渉学ワークショップ」を開催しました。社会人も参加して学生主導で行うワークショップは昨年続き、2回目の開催になります。昨年同様、会場は交渉学を学ぶ人たちの熱気に包まれました。

午前部では、ポスターによる大学でのアクティブ・ラーニングの取組について、学生目線で情報共有を行いました。本学のLA（ラーニング・アシスタント）として活躍する学生、追手門学院大学の学生、東京富士大学の学生、神戸親和女子大学の学生がこれまでに取り組んできた学習活動を共有しました。プレゼン方法も様々で、漫才形式や演劇風にアピールするなど、ポスター担当者の個性があふれたセッションになりました。

午後部は、「関大×交渉学」の現状報告から開始。学生による「ももたろうといぬのきびだんごを巡る交渉ケース」などを通して、交渉の場で個人のもつ背景をしっかりと考えることの重要性を学びました。参加した学生と社会人が意見を交わし合う中で、互いの視点の違いに気付くなどとても刺激ある時間になりました。



IBM本社にてIBM社員と学生が「交渉学ワークショップ」

報告者：山本 敏幸（教育推進部 教授）

2016年8月5日、東京都・箱崎にある日本アイ・ピー・エム株式会社（日本IBM）の本社で、本学のLA（ラーニング・アシスタント）として活躍する学生を中心に、追手門学院大学や東京富士大学の学生を交えて、日本IBM社員と交渉学の合同研修を行いました。

研修では、日本IBMアナリティクス事業本部技術統括部長の大塚知彦氏を講師に、「交渉学の入り口：日頃見落としがちなきっかけから」をテーマとしたプログラムを社員の方々と合同で実施しました。レシートを見比べるセッションでは、相手が発信している情報の意図するところ、背景情報をいかにくみ取り、win-winの交渉に到達するかという交渉学のポイントを社会人と学生の混合チームのグループディスカッション・全体共有のワークショップ形式で学びました。その後、日本IBMの歴史やITの変遷について、社内見学を通して学びました。

参加した学生たちは、ビジネスの第一線で活躍する社員の方々と議論を行い、今までとは違った視点から交渉学について考えるきっかけとなりました。



（感想：政策創造学部4年 松田昇子）

レシートを見比べるワークでは、今まで何気なく受け取っていたレシートに店の想いが詰まっていることを知りました。ただ違いを見つけるだけでなく、「なぜ違いが生まれたのか」を考えることで気づくことが多々ありました。これからも自分の身の回りに興味を持ち、疑問を持つことを大切にしたいと思います。その後、IBMの社内を見学させていただきました。伝統を大切にしながら、新しいものに挑戦されていることが空間から伝わってきました。社会人の方と交流できる機会はなかなかないので貴重な体験になりました。

LA研修を開催

日 時：2016年9月15日(木) 10:00~12:30

場 所：千里山キャンパス 第2学舎C301

参加者：42名

報告者：三浦 真琴（教育推進部 教授）

2016年9月15日にLA（ラーニング・アシスタント）研修を開催しました。秋学期に活動するLA42名が研修に参加しました。

研修の目的は、例年と同じく、新任のLAが業務概要を知り、必要とされる心構えをもつこと、経験者・新任の別を問わず、グループワークを円滑に進めるために必要な技法を体験し、受講生に説明できるようになること、以上を主な柱としたものでした。

まず、四字熟語を一字ずつ分解したカードに、四字熟語を形成しない他の文字を記したカードを加え、一人に二枚ずつのカードを配った上で、四字熟語が成り立つようにグループメンバーを探すとこのグルーピングを体験してもらいました。実際の授業でも、このようなグルーピングが行われるため、経験者にとっては、その確認作業の、新任LAにとっては予行演習の意味を持つ作業でした。そのようにして構成されたグループに分かれた後、クロスロードゲームを体験してもらいました。もともとは防災教育のために開発されたものですが、数少ない情報だけでYesかNoかの意志決定をするのではなく、様々な状況を勘案し、可能な限り多くの選択肢を用意しておくことが大切であるということ、ならびに多数決によらない意志決定を体験しておく必要があるということを理解してもらいました。テーマに選んだのは「グループワークにおいて他のメンバーをかえりみずに私語をくりかえす学生にどのように接するか」という問題でした（実際の授業で起きたことです）。LAは真摯に話し合いを重ね、可能な限り多くの選択肢を用意することができました。その結果、無条件に介入するのではなく、その時々状況に応じてLAが介入したり、教員に対応をお願いしたりするなど、よりよい解決のための方策を考える機会を得ることができました。その後、授業で活用することが以前に比して格段に多くなったルーブリックの意義と価値を学んだ上で、その作成作業を体験しました。

この研修を通じて、新任LAは、これから就く任務について理解し、さらに先輩LAに相談するという選択肢を新たに得て、不安を軽減させることができました。既にLAとして活動している学生も、LA間のコミュニケーションをさらに深めることの意義を再確認し、そのための企画を考える機運が生まれたようです。

「國學院大學経済学部開設50周年記念企画 アクティブ・ラーニング 学生アシスタントフォーラム」に本学のLAが招聘されました

報告者：三浦 真琴（教育推進部 教授）

2016年10月29日（土）、國學院大學渋谷キャンパス（常磐松ホール）を会場に「アクティブ・ラーニング学生アシスタントフォーラム」が開催され、本学の教員とLAが招聘されました。このフォーラムには、國學院大學の経済学部の学生FAと、同様の制度を導入してアクティブ・ラーニングを実践している立教大学と関西大学の学生が集い、アクティブ・ラーニングをアシストする学生の視点から、それぞれの大学での取り組み成果を報告した上で、より効果的なアクティブ・ラーニングを実践するために、学生アシスタントにどのような役割が求められるか、注意すべき事柄は何か等についてパネルディスカッションを行いました。

本学のLAは、他大学の学生アシスタント（FA：國學院大學／CA・SA：立教大学）と比べると、マニュアルをもたない、研修を学生自身が企画・実施する、採用にあたって書類審査や面接を行わない、他大学の教職員や学生との交流がある、という点で、学生アシスタント制度のフロントランナーであることが、改めて確認されました。以下に、フォーラムの様子を一部再現するとともに、フォーラムに参加したLAの感想・報告を記載します。

▽フォーラムの様子（一部：関西大学の教員・LAの発言場面に限定）

（前略）

続きまして関西大学の皆様、よろしくお願ひ致します。関西大学は、質問へ応答する形での事例紹介となります。

関西大学の三浦です。よろしくお願ひします。

松田です。よろしくお願ひします。

大早です。よろしくお願ひします。

安井です。よろしくお願ひします。

はい。じゃ、ええと、私がこのパートはですね、モデレーターという形でちょっと質問を投げながら進めてみたいと思うんですが、まずその、最初に、これまで2校と少しはぶん形が違うLA制度というのが意味で進んでいるのが関西大学だというふうに向ってます。実際どういった形で授業にLAが配置されているのか、ざくっとした概要をですね、どなたかに。三浦先生お願ひします。

三浦：そうですね、制度云々ではなく、まず、わたたくしたちの考え方をお伝えしようと思います。出発点はTeachingからLearningへのパラダイムシフトです。さきほども“From Teaching to Learning”の話が出ましたが、大学は教育（Teaching）を提供する機関ではなく、学習（Learning）を創出する機関である、そのように高らかに宣言されたことをわたたくしたちは真摯に、そして丁寧につまみとしました。大学に限らず、教師は「教える」（TeachingあるいはTo Teach）と対をなすのが「学ぶ」（LearningあるいはTo Learn）であると思っています。しかし、それは間違いです。「教える」（To Teach）の対となるのは「教えられる」（To be taught）です。教師が教えたとき、学生は教えられるはいる、しかし必ずしも学んでいるとは限らない—いわゆる「教えたつもり」ですね—では、どうすれば学生は学ぶことができるのだろうかという事を考えました。

1995年、FDを巡って新たにパラダイムシフトが宣言されたばかりの時に、大学などを視察するためにアメリカの北東部を訪れました。ハーヴァード、MITなどを訪問したのですが、先方よりFDとは何かご存知ですかと問われたので、“From Research to Teaching”という言葉織り交ぜながら応じたところ、それはもう古いと指摘されました。今、アメリカの大学は“From Teaching to Learning”を目指している、教えても学ぶとは限らないからだ、概ね、そのような説明を受けたのですが、大いなる衝撃を覚えました。「教師中心」から「学生中心」へ、というのがパラダイムシフトの重要な中身なのですが、学生が中心であるのなら、「To be taught」のよう

に受動態で表現されることがあってはならないはず。教育パラダイムが支配していた時代には、教師と学生は“To teach”と“To be taught”の関係にありましたが、学生中心主義をとる学習パラダイムの時代、学生と教師の関係は“To learn”と“To assist learning”にならなければなりません。

教師が学生に手取り足取り、何でもかでも教えてしまうのでは、学生は受け身になるばかりです。学生が主体的、能動的に学ぶことができるように、意図的に何かを教えて、敢えて何かを教えないという取捨選択を行いながら、その学びを支援する、それがこれからの大学教師のミッションであらねばならない、そのように考えました。

とはいえ、私たち大学の教師は「教えたがる」という職業病に罹っている（教えないのは怠業であるという強迫観念にとらわれているので）、教えないという選択肢を意図的に持つのはなかなか難しいと思います。そこで、わたたくしたちよりも感性が瑞々しく、頭脳が柔軟な学生の登場です。学生が求めている知的好奇心への刺激、これは職業病に罹患した教師ではなく、学生の方が敏感にキャッチし、大切にしてくれるはず、そのように考えました。この期待に応えてくれる学生スタッフ、それがラーニング・アシスタント（LA）です。理念としては、教師もLAとして、学生の学びを支える存在であってほしいのですが、百年河清を待つがごしのようなことはできません。まずは、瑞々しい学生の感性と意欲を大いに尊重し、活用しようと考えました。学生アシスタントの方が教員よりも受講生に年齢が近く、親近感を覚えやすい、ということも、もちろん、勘案しました。わたたくしたち教員だけで抱え込んで、二進も三進もいなくなるよりは、学生に任せ方がうまくいくに違いない、そんな風に考えたことが、そもそもの出発点ですね。教師がやるのと年齢に近い学生がやるのとでは受講生のレスポンスが異なります。LAと私が同じように対応した場合に、LAによるヒントの提示に対して学生が「わかった」という表情をすることしばしばですが、教員には何か欠けているのだと、省察の材料にしようと考えられるようにもなりました。

さて、そのLAですが、どのように選ぶのか、育てるのか、ということについて簡単にお話します。

関西大学では、書類審査や面接などは行いません。採用については、LAを活用するクラスを担当する教員に任せています。教育開発支援センターの専任教員のほとんどが15回にわたる授業の中で受講生の様子を見ながら次なるLAを決めているようです。つまり一本釣りですね。教員がLAとして適任だと考える学生と、そのクラスで活動するLAが次期LA候補として考える学生は、ほぼ常に一致します。そればかりか、声を掛けた学生自身もLAをやってみたく願っていたケースがほとんどで、つまりはほぼ毎回ハッピーマリッジとなっています。15回にわたってつぶさに観察してきたわけですから、そこに志願理由書や面接などは必要ないのです。そのようにして選ばれた学生は、原則として自分が受講した科目にLAとして入ります。それはその科目のコンセプトや教員の願いとねらいがわかっているからなのですが、時間割の都合でその科目の既修者がLAとしてそのクラスに入れないこともあります。しかし、LAとしての経験を積むに連れ、ホスピタリティやアビリティが向上していくので、他の教員が担当するクラスであっても、遜色なくLAとして活動することができるようになります。このように自由度の高いのが関西大学のLA制度の特色です。特筆すべきことはまだありますが、それは松田から説明してもらおうと思います。

なるほど。ありがとうございます。ちなみに、その例え一本釣りで、お三人は実際に経験をされたという事だと思ふんですが、ちょっと意地悪な質問かもしれないんですけど、これはどの大学も抱えてる事で、言われて、「楽しそうだな」と思う、引き受ける前と、いざやってみると「やっぱり大変だな」という事っていっぱいあったと思うんです。で、その大変さを自分の中で消化して、でも、結果として今、ここの場にこうやって3人、立って頂けるように、まあ、ある意味、自分がやってきた事を誇りに思えてる、きっかけとか転換点って、何かありましたか。あればちょっと、お一人、如何ですか。

松田：そうですね。私は大学1年生の秋学期からLAとして入っているのですが、最初、三浦先生じゃない先生から、さっきの言葉で言うと一本釣りされてLAになりました。他大学の皆さんと同じように私も、授業に入ってくれていたLAに憧れてLAになりました。最初は「楽しそうだな」と思っていたのですが、本当に大変な事も多くて。実は、関西大学にはLAのマニュアルというものが存在しません。これはあえて存在させていなくて、それは何故かと言うと、「個人の強みを活かしたLAになりなさい」という、大学からのメッセージだと私は思っています。マニュアルを作る事でみんなが同じようなLAになると、私である必要が無くなってしまふ。だから「私だから出来る事って何だろう？」「私が活かせる、私が活かされるLAって何だろう？」っていうのをずっと

考えています。それがすごく苦しくて大変で・・・先輩のように自分にしか出来ないL Aになりたいけど、簡単には出来ないことに不安やもどかしさがありました。最初の一、二年は苦勞しましたが、4年生になってから徐々に自分のL A像が固まってきました。彼女とかは2年生でまだ半年しかL Aをしていないので、今、ちょうど探しているところだと思います。L A像が見つかった時が一番楽しくなったし、私が「L Aをして良かったな」と思った瞬間です。

ありがとうございます。

そうすると例えば、立教大学の話と少しかぶりつつ、相反するというか、対照的な部分もあると思っていて、それは、年度が重なってこういう制度が出来た時に引き継いでいくと。他方でも、自分の個性で自分らしいL A像を出さなきゃいけないっていうところで、関西大学さんでは例えば、今、まあ2年生で、引き継ぎとか、例えば先輩の確保をどうされたかっていうのは聞いたりする機会っていうのはあったりするんですか。

安井：はい。私は今2年生で、この春からL Aをさせて頂いているのですが、「引き継ぎ」というのは、それこそマニュアルが無いのと同じように、「こういうふうな場合はこうしたい」という直接的に先輩から後輩に伝授する形はあまりとっていません。私が最初に入っていた授業で、この松田さんがL Aとして入っていらっしゃって・・・彼女は私が憧れたL Aの一人でした。私がL Aになってからは「引き継ぎをされる」のではなくて、自分で「どうしたらいいのか」を考えるようにしています。

松田：すいません、前提として、私達の授業では、一つの授業にL Aが3、4人入っていて、今、私と安井は同じ授業に入っています。だから、安井が言ったのは、先輩から後輩に言葉で引き継ぐのではなく、後輩である安井が先輩の私の背中を見て学んでいるという意味だと思います。はい。以上です。

三浦：もう一点、お伝えしたいことがあります。L Aは、授業で活動した後、48時間以内にリフレクション・ペーパーを作成し、提出することにしてあります。このリフレクション・ペーパーは、教育開発支援センターの中に限り、公開されているので、他のL Aが書いたものを誰でも閲覧することができます。先輩に憧れてL Aになった後輩は、その憧れの先輩が書いたリフレクション・ペーパーを実につぶさに読みます。そこで、例えば、このような場面では、このように考え、行動すればいいのか、あるいは先輩にも悩むことがあるのか、ということを知ります。同期のL Aのリフレクション・ペーパーも、励みになったり、共感を覚えたりするものになります。

つまりその「経験録」みたいなものが置いてあって、それをその各自、自分が興味が湧いた時に参照していくって、そんなイメージなんですかね？

三浦：興味を覚えたからであったり、必要に迫られたりしてであったり、さまざまだと思います。

他方、こう、例えばその、複数クラスで同時展開をされる、つまり同じシラバスで、違う先生なんだけれども複数クラスで展開されるL Aの経験っていうのは、関西大学でもおありですか？

三浦：あります。

その時に、隣のクラスのL Aとの共同とかって結構必要不可欠だと思うんですけど、僕は実はその参観に伺った事が無いので正直、温度感っていうのはちょっと分かってないんですけど、どれ位その期中、つまり、同じ学部の思想のL A同士でない事も多いわけですね。だから、そういう中でどういうふうにコミュニケーションをとったりとかされてるのかなと、つまり、仲がいいのかな、どうなんだろうっていうところを聞いてみたくて、如何ですか。

大早：かなり仲がいいです。L A制度はずっと続いているので、クラスを超えた関係も構築されています。そのため、他のクラスのL Aさんであったとしても、そのクラスでどういう事をしているかを情報共有することができます。あと「L A合宿」という合宿や研修も、学生である自分達が企画してつくって、「L Aってどういうも

なのだろう」とか「こういう授業ではどういうふうにする方がいいかな」ということを考える機会を設けています。その時に、他の授業の事とかも知ることができます。

三浦：さきほど、一本釣りの話をしましたが、L Aとしての活動を依頼し、快諾をしてもらったとしても、時間割の関係で、当該科目にL Aとして入れないということもあります。どうしてもこのクラスには3名のL Aが必要だという時は、ほかの先生が一本釣りしたL Aをお願いする事もあります。そのL Aさんが自分の履修したクラスを担当する教師しか知らないとか、そのクラスを担当するL Aさん以外に知り合いがないという事はありません。それから、CTL（教育開発支援センター）には、L Aさんが集まって懇談出来るスペースをつくってあるので、そこにL Aさんが集まります。そこでは実にさまざまな会話をして、情報を交換したり、共有したりしています。

なるほど。ありがとうございます。

そうすると、最後に、これは先生に対しての質問になるかもしれないんですが、実はあの、ちょっと質疑の出来なかった関係で、いくつかフロアから頂いた事があって、教員とでは、学生アシスタントの違いって、どう解釈するかっていうのは大学やその先生方によっても多少変わるのだろうと。で、まあ、冒頭、三浦先生のおっしゃった、まあ、その発想、マインドからした時に、先生のお考えとしては、学生アシスタントと教員の役割の違いってどこにあると思われませんか。

三浦：これからの教師はラーニング・アシスタントであってほしいと願っているのですが、ネーミングの上での役割の違いを明示するようなことは特にはありません。しかし、それでは教師など必要ないのではないかという方向に話がそれてしまう危険もありますので一実際にG Pのヒアリングの際に、そのような質問をされました。もう少しだけ丁寧にお話しておこうかと思えます。これまでの教師は、無条件に、そして無防備に、あるいは無責任に「教える」ことがミッションとされてきました。無防備もしくは無責任というのは「教えていればそれでいい」「学ばないのは学生自身の問題だ」という考え方がそこに付随しやすいという意味です。学生が主体的に、能動的に学ぶ機会を提供するために、教師は何を教えて、何を敢えて教えないかということを用意的に選択する必要があります。新しい学習パラダイムにおいては、知識は教師の独占物ではなく、学習者が自らの経験を基盤として発見・発掘し、さらに構造化しながら獲得していくものとされました。これに伴い、教師のミッションは「教える」ことから「学生が効果的な学習を体験できるように配慮すること」、あるいは「学生間のチームワークを構築すること」へとシフトします。つまり、教師の役割は、teachingから学生のlearningを支えるためのcoachingへと変化し、“How to Teach”ではなく“How to Learn”あるいは“What to Teach”ならびに“What not to Teach”を授業デザインの基盤とする必要があります。これを総じて教師の役割を学生の学びの振付師（コリオグラファー）、あるいは舞台監督と呼んでみたいと思います。

ありがとうございます。

以上で、ちょっと短い時間ですけど、引き続き、今度は立教大学の皆様と、國學院の皆様にご登壇頂いて、パネルに移っていきたくと思います。ありがとうございました。

関西大学の皆様、ありがとうございます。

それではこのままパネルディスカッションへ移りたいと思います。パネルディスカッションにご参加頂く皆様はご登壇下さい。モデレーターである松岡様、よろしくお願致します。

一応、そのテーマとして、ここではいくつか要素を挙げたいと思います。「育成」という観点。つまりL Aの育成についてと、それから、これまであった学生からの提案とかってというのが、どういうものがあったのか、つまり、まあ、もう少し噛み砕くと、どういうふうのリフレクションであったり、フィードバックを促しているのかっていった辺り、是非ちょっと伺ってみたいんですが。最初に関西大学の皆様は、どういうふうにするのかというところ、そのしくみですとか、そういったものがあれば教えて頂きたいなと思います。

松田：はい。先程もお話したように、私共には「リフレクション・ペーパー」というものが存在します。何を書くかは個人の自由というか、それぞれに任せられているんですけども、私が意識して書いている事は、受講生がどういう状態だったのか、それを自分がどう判断したのか、それを基に自分はどう動いたのか、結果、受講生はどう変わったのかという事を意識して書くようにしています。

ありがとうございます。

ちなみに、そういう取り組みから、自分達の中で「変えていけたな」って思う事っていうのはそれなりに数、学期中出てくる印象なんですか？

松田：そうですね。やはり「リフレクション・ペーパー」を書きながら自分の中では「来週はこうしよう」と思う事はもちろんあります。また、この3人が1つの授業に入っていたら、3人で読み合いをして「今週はこうだったよね」「来週はこうしようね」という話し合いを行ったりもします。

なるほど、ありがとうございます。

(中略)

三浦：もう少し関西大学のLAを宣伝させてもらっていいですか？まず、規模が違います。現在、108人のLAが登録されています。この規模で、どのようにしてクオリティを維持しているのか、皆さん気になさると思うのですが、まず研修が3種類あります。1つは、教員・事務職員が学期の始まる前、3月や9月に行うものです。LAとは何か、どのような経緯があって生まれてきたものか、GPの概要を説明したり、勤務報告書やリフレクション・ペーパーを提出する義務があるという事務手続き上の話をしたりします。その後、ショートバージョンですが、グループワークを体験してもらいます。受講生としてグループワークは既に経験していますが、これからは受講生のファシリテーションが求められるので、この体験には大切な意味があるのです。この他に、LA自身が企画する研修があります。かつては合宿を伴うものと、そうではないもの、二通り実施していた時期もあります。

事務職員と教育職員がLAを見ていて必要だと感じた事があります。彼ら彼女たちは、ホスピタリティが非常に高く、「自分達のために」じゃなくて、そこにいる「学生のために」を最優先します。言い換えると、自分の事を後回しにします。自分たちのことも受講生と同じように大切にしてほしい、そのように願って、ラーニングバリューという会社が提供する「自己の探求」というプログラムに参加してもらおうようにしています。もともと、自己の探求に迷い、焦り、悩む初年次学生を導いてほしい、そのように考えて、ファシリテーションを念頭に置いていたのですが、このプログラムの参加したLAが、次第に自己を解放し、のびのびと活動できるようになるのを目の当たりにしてきました。このような自己研修プログラムは、質の良いものを選んで体験してもらい価値があると思います。

もう一つ、活躍するのは大学の授業に限られないということです。台湾で開催される国際学会でスタッフとして活動したり、他大学のFD研修会や講演会に招聘されたわたくしに随伴して、教員を相手に、グループワークのサポートやファシリテーションを実に自然におこなっています。以上、関西大学のLAの宣伝でした。

(中略)

ありがとうございます。

逆に皆さん、もう一つ二つ、お互いの学校についてのご質問があれば…。

三浦：割って入って申し訳ありません。宣伝その2です。おかげさまでもちまして、少しずつ知名度も上がっているのか、聖路加国際大学や園田学園女子大学でもLA制度を取り入れたいと言って、教職員が視察に来たり、こちらが先方を訪れたり、他大学の学生(LA)が関西大学の研修や合宿に参加したりするなど、大学間の交流、学生同士の交流が心地よい頻度でおこなわれるようになっていきます。立教と國學院とのあいだでも、そのような交流はされてるのでしょうか。

(中略)

最後にあの、ちょっと各校に聞いてみたい事が一つあって、これは角度がまた違う質問なんですけれども、「内向的な学生に対してどういうふうに入介入をするか」というところもフロアの質問にちょっとあったんですね。つまり、特にそれは教員の皆さんというよりも、学生アシスタントの皆さんに一つずつちょっと聞いてみたいんですけど、グループワーク、最初1年生集めた時に、ワークがちょっと苦手そうなおとなし目の子が居た時に、「活発になりなよ」というのは結構厳しい事かなと思うんですね。でも、その彼等、彼女達のリーダーシップ、学習目標を引き出していくってところでは何か工夫されている事っていうのはあったりしますか。立教大学から順に、これは最後、ご回答頂きたいなと思います。

まず最初に、2回目の授業位ではもうグループというのをつくるんですね。4、5人のグループなんですけれども、そこまで出来れば、ちょっと内向的そうだなという子とその子を引き立ててくれるような子を、例えば組み合わせるとか、そういうのは実際にSAがやっていた事ですし、グループワークが始まってからは、例えば、授業でいきなり指したら内向的な子はたぶんドキッとしちゃうと思うので、例えば、グループワークに、授業内のグループワークに参加している時に実際に見に行ってみて、そこで「じゃあどう思う？」って聞いてみてあげたりとか、そういう何か、いきなりドキッとしちゃうような事はしないようにしました、私は。

私は、その、グループの中に、先程君塚さんが言っていたように、その、内向的な人とその人の意見を引き出してくれそうな人が、グループ一緒になるように、まあ、SAが組んだりしてくれてたので、その時に、まあ、グループワークを見ていて、その直接内向的な子に「どう思う？」って声をかける事もありますし、その同じグループの子が悩んで、「どうしたらいいですかね」というふうに言われた時には、「じゃあ、どうしたら発言してくれると思うかな」というふうに投げ掛けて質問してみたりとか、まあ、直接話すのは難しいかもしれないので、何か「LINEとかしてみたら？」とか、何だろう、自分達から引き出すというよりも、受講生に引き出させるような工夫をしていました。

ありがとうございます。

國學院の場合はたぶん内向的な子が最初多いんじゃないかなって気がして、僕の体感なんですけど。そうなった時にまず自分で声を掛けるようにしています。グループの中で全員が内向的だったっていうパターンもあったんで、まず自分と仲良くなって、吐き出せる場というか、意見を吐き出せる場が必要なんじゃないかなと思って、それを自分が担うようにしていました。

そうですね、やっぱり内向的な人は多いんですけど、自分のクラスは結構元気な子が珍しく多くてですね、まるっきりやる気が無くなって人はあんまり居ないんですけども、何か、ついていけない、ついていけないって人が多いので、そのグループでどういう事をやってるのかっていうのを一緒に…(?)してもらったりとか、クローズド・クwestionよりもオープン・クwestionをよく使うようにして、引き出すように努力しています。

松田：今ここにいる皆さんに質問したいのですが、「私、外交的だよ」とって人、居ますか？では、逆に「私、内向的だよ」とって人、いますか？ありがとうございます。私はまさにこれだと思っていて、自分が外交的であっても内向的であっても、言えない雰囲気というのが最初はあると思うんですよ。それをぶち壊すっていうのが、私の仕事だと思っています。

安井：私も、LAが皆同じにならなくていいように、グループワークに参加している学生さんも別に皆さんが同じ様に発言する必要はないと思っています。そのため、私は「どういう事やっているの？」と聞いた時に最初に答えられる人がいない時は、一回答えたら、どんどん言えるようになるかもしれないので、私もその、ぶち壊すじゃないですけど、その雰囲気を変えられるような発言とか投げ掛けをするように心掛けています。

大早：私も同じ様な感じなんですけれども、私がLAとして入っている授業では、グループは私達LAとかが決めずに、1回目とか2回目の時に学生達で作らせるんですよ。で、その時にやっぱり合わない人とかもいたりとかするので、そこは絶対LAが介入して、その場をぶち壊して、みんなで仲良くできるようにしています。私達でグループワークがどうなっているかを客観的に見て、「あ、この子、ちょっと内向的かな」と思ったら、その人達に「どう思う？」という、ひと声掛けてグループを活発にさせています。

ありがとうございました。

(後略)

▽フォーラムに参加したLAの感想

今回、國學院大学でのフォーラムに参加させていただき、学んだことが2点あります。

第1に、「学生（受講生）を支援したい」という想いは同じでも、その手段である制度には各大学の『色』が出るということです。同じような活動をしている学生や先生とお話をさせていただいたことで、関西大学の制度を客観的に見ることができました。例えば、今までは経験やスキルを受け継ぐために、学生自身が研修や合宿を創ることを当然だと思っていました。しかし、他大学では企業の方がされていることを知り、非常に驚きました。どちらが優れているか、進んでいるかという問題ではなく、各大学に適した制度があるということだと思います。他大学のことを知ることで、自分の大学の受け継いでいくべき伝統と、革新するべき点を知ることができました。これからは今回気がついたことを仲間たちに伝えていこうと思います。

第2に、1人の学生の想いが大人を動かし、学校を動かすことができるということです。今回、最も影響を受けたのは迫田くんの熱い想いでした。「後輩に何か残したい」という気持ちを原動力に、先輩として新しい役割を創り出している姿には非常に刺激を受けました。関西大学で学生アシスタント制度が始まったのは10年ほど前なので、私たちは立ち上げの時のことをほとんど知りません。そのため、自分たちが「学生アシスタントとは何なのか」と模索している彼らの姿を見て、かっこいいな、輝いているなと思いました。私たちも、先輩たちが創り上げてきてくださった伝統をどのように進化させていくのか考えていく必要があります。今回のワークショップで、自分たちがなりたい学生アシスタント像を探求するヒントをたくさんいただけたので、今後生かしていきたいと思っています。

最後に、このような機会をいただけたことに心から感謝いたします。今回できた縁をこれからも大切にしていきたいと思っております。今後ともよろしく願いいたします。

関西大学 松田昇子、大早亜美、安井明日香

第7回交渉学ワークショップ「交渉学をリードするブレインの育成」を開催

日 時：2016年10月30日(日)13:30~17:00

場 所：梅田キャンパス 701・705

参加者：35名

報告者：山本 敏幸（教育推進部 教授）

10/30 2016 日
13:30-17:00 (13:00開場)

【会場】
関西大学 梅田キャンパス 701・705 (7階)
〒530-0014 大阪府大阪市北区東御町1番5号

教育開発支援センターでは、関西地区でのさらなる「交渉学」の普及、啓蒙活動の一環として交渉学ワークショップを開催いたします。関西地区の大学における大学生のアクティブ・ラーニングによる学びに関心をお持ちの社会人や大学関係者のみなさま、信頼を構築・維持するためのコミュニケーション力を身につけたい大学生はぜひご参加ください。

【プログラム】

13:30~13:50	講師・ファシリテーター・スタッフ紹介 社会人における交渉学の活動の紹介
13:50~14:55	社会人と大学生の交渉学研修 【講義】交渉学的基础 【演習】交渉事前準備(各自) 【演習】作戦会議
14:55~15:05	休憩
15:05~15:45	【演習】模擬交渉 感想戦
15:45~16:05	【講義】全体フィードバック
16:05~16:35	最新活用事例紹介 (大学生が交渉学活用の事例を紹介) →交渉学入門、クリティカルシンキング、学生発案型→
16:35~16:45	アンケート記入
17:00	閉会

【講師】
三浦真琴(関西大学 教育推進部 教授)
山本敏幸(関西大学 教育推進部 教授)
田上正範(関西大学 非常勤講師、追手門学院大学 准教授)
松本俊明(関西大学 非常勤講師、弁護士)

【参加費】
無料

【お申し込み方法】
10月27日(木)までに、専用Webサイト
http://www.kansai-u.ac.jp/ap/「お知らせ」内
記事の「申込フォーム」からお申込みください。

【お問い合わせ】
関西大学 教育開発支援センター 事務局
〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL:06-6368-1513
E-mail:ap-info@ml.kandai.jp

主催：関西大学教育開発支援センター 共催：富士ゼロックス西日本株式会社

平成28年度「大学教育再生加速プログラム」採択
「21世紀を生き抜く行動力(Lifelong Active Learner)の育成」

関西大学

新しく大阪の中心にオープンした関西大学梅田キャンパスにおいて、本学のスタディスキルゼミのLAとして活躍している学生、追手門学院大学で交渉学を学ぶ学生、本学卒業生を含む、富士ゼロックス社を中心とした社会人が総勢35名集い、大学生と社会人が協働で学ぶ交渉学のワークショップを開催しました。

社会人と大学生が協働で行う交渉学の研修は、関西地区では今回が初めてとなります。関西大学梅田キャンパスを拠点として、新たな企画をスタートできることはうれしい限りです。

研修内容は、本学において交渉学の非常勤講師をされている松本俊明氏より、交渉学の基本的概念、考え方、日常生活における活用方法についてミニレクチャーがありました。その後、実際のケースを使い、登場人物の置かれた状況を把握した後、ロールプレイ・シミュレーションによる対話型ワークを行いました。ミニレクチャーで紹介された交渉学のポイントをロールプレイ・シミュレーションで実践して身体化を行いました。その後、ま

とめとして、全体のふりかえりセッションを行いました。最後に、社会人、学生のこれまでの交渉学の取り組みについて情報共有をしました。

今後は梅田キャンパスを拠点として、今回の社会人参加者の皆さんと共に、本学の学生、関西地区の学生と社会人が共に展開していく交渉学のリーダー育成プロジェクトを邁進させ、関西地区での交渉学の啓蒙活動・普及に取り組んでいきたいと計画しています。



ミニレクチャー



交渉の準備グループワーク



1対1の対話型ロールプレイシミュレーションワーク

第9回LA合宿研修を開催

報告者：三浦 真琴（教育推進部 教授）

2016年11月12日（土）・13日（日）の両日、関西大学高槻キャンパス高岳館を会場に、第9回目のLA合宿研修が開催され、学生18名、教員3名、職員2名が参加しました。

本学のLAには業務用マニュアルがありません。マニュアルがあると、そこに書かれていることしか見なくなり、書かれていないことに思いが及ぶことがなくなるのが懸念されるため、意図的に作成しないようにしているからです。マニュアルを持たないLAは、どのように授業の運営や受講生と関わっていくのか、先輩や同期、場合によっては卒業生にも相談しています。このような関係が日常的にあるのは、合宿やそのほかの研修などを通してLAの間に紐帯が形成されているからです。

今回も今までに培われた紐帯を確認し、今後、さらにそれが豊かに力強く育っていくことを目的に研修が実施されました。その内容も方法も全て学生自身が企画したものです。近年、学生アシスタントを任用する大学が増えていますが、その学生アシスタント自身が自らの研修を企画・開催する大学は本学だけです。

今回は、卒業を控えた四年生が後進を育成することに十分な配慮を施しており、ホスピタリティが関西大学LAの誇るべき伝統になりつつあることを実感しました。その恩恵に浴した学生の感想を紹介します。

「私は今回のLA合宿は運営委員という形での参加でした。去年のLA合宿とはまた違うワークをしたいという気持ちがあり、たくさん考えて作らせてもらいました。運営委員のみなさんと協力し、サポーターの先輩方の支えもあり、LA合宿を無事に終えることができたと思います。また、運営委員というとてもいい経験ができ、私自身の新たな発見ができたと思います。何よりもLA合宿参加して下さった皆さんの楽しそうな姿を見られたことが一番の満足でした。」こうやって先輩から後輩へのリレーがより確かで豊かなものになっていくのだと思います。



LA合宿研修にて

ラーニングバリュー研修「自己の探求Ⅰ」を開催

報告者：三浦 真琴（教育推進部 教授）

2016年12月3日（土）・4日（日）、考動力及びリーダーシップ育成研修を実施しました。株式会社ラーニング・バリューの提供するプログラム「自己の探求Ⅰ」によるLA研修は、今年度で3回を数えます（2015年度には「自己の探求Ⅱ」による研修も行いました）。LA研修の一環として、このプログラムを選定したのは、もともとは、自己の探求に迷い、焦り、悩む初年次学生が肯定的な自己像を獲得できるように導いてほしいと願ってのことでした。しかし、実際に当プログラムに参加したLAを観ていると、次第に自己を解放し、以前にも増して伸びやかに活動できるようになることが分かりました。LAとして活動する彼ら彼女たちは、ホスピタリティが非常に高く、「自分たちのため」ではなく、あくまでも「そこにいる学生のため」に動くことを最優先に考え、自分たちのことを後回しにしていたのだということに思い当たり、以後は、何よりLA自身が自己を意識し、確認し、解放する機会になれかしと願って、このプログラムに参加することにしています。今回の参加者は24名でしたが、その中には昨年と同様に他大学からの参加者もありました。

このプログラムが自己の発見、確認、そして解放、すなわち自己の成長に大いに貢献していることは、LAが綴ったアクションプランや感想に明らかです。以下に、3回に亘って、このプログラムに参加したLAの文章を掲載します（なお、本文に登場する固有名詞はイニシアル等であらわすようにしました）。

2014年12月6日・7日 「変わる」から「変える」へ

私は今回の研修で何か出来ないことを見つけると、それが出来ない自分を嫌になるということが分かりました。しかし、研修後に何かが出来ない自分を認めることは、向上心がないこととは異なるのかという問いが生まれ、この両者の違いを見つけたと思いました。

私がこの研修を受ける前から二十歳を機に変わりたいと思っています。それは、先輩が卒業されて、自分たちが引っ張っていく学年になるという焦りや、法律的に大人になるという不安や期待があるからです。そのため、この数ヶ月間は、自分に出来ないことを無くそうと思っていたのですが、今回の研修で、それは少し違うのではないかと気がつきました。

私と同じ班だったFさんは、何かを理解することが、人よりも遅いと感じているそうです。しかし、そういう自分を否定するのではなく、自分と同じようにゆっくりと理解していく学生さんの気持ちを理解できるLAさんだという自信を持たれていました。私は、その姿に感動し、Fさんの前向きなところを尊敬しました。

何かが出来ない自分を認めずに無理をしたり、結局、他人のせいにして自己嫌悪に陥る私は、楽をしているのだと思います。出来ない自分と向き合い、それをうまく長所、強みにできる方法を探すことの方が困難だし、これを向上心と呼ぶべきです。今回の研修を通して、私の二十歳の目標は出来ない自分から出来る自分へ「変わる」のではなく、弱みを強みに「変える」になりました。二十歳になる前にこの研修を受けることができ良かったです。

2015年12月12日・13日 1年の振り返りにはKマジックを

私は去年も自己の探求Ⅰに参加した。当時の私は、自分を知ることを使ったことがなかったので、嫌ほど自分が分かると同時に、周りの人に暴かれてしまうワークが衝撃的だった。これほど面白いものはないと思ったのだが、今年は「去年と同じワークをして得るものがあるのだろうか」と思っている自分もいた。しかし、Kマジックには何回もかかることを私は実感した。なぜなら、私がこの1年間どういうことを意識してきたのか、その結果、今、自分はどうなっているかを客観的に見る事が出来るから

である。同じワークをしたのに、去年とは異なる結果が出た時、私は自分が日々変わっていることに改めて気がついた。

例えば一番始めに行うライフポジションのワークでは、去年はDo & Plan型だったにもかかわらず、今年度はDo & Look型になっていた。この変化は自分自身でも気がついていたので、客観的にこの結果を見てひどく納得した。私を含め3人の学生で企画してきた「恋する学問」という授業で、私よりもDo & Plan型がいるので、意識的にLookやThinkを担当しようと思っていたからこそ、Do & Look型になったのではないかと、一人で分析している自分に気がついたのも面白かった。

私は今回の研修で、自分や相手を知ると同時に、この1年も振り返ることができた。今年、去年同じ班だったEさん、Kさんが来て下さったように、私もこの研修に卒業してからも参加したい。そして、自分だけでなく、班員の1年の変化を見守り続けたい。来年もKマジックにかかって1年を終えたいと思う。

2016年12月3日・4日 なぜ、今年は泣かなかったのか

2年前、12月、初めてこの研修を受けた時、私は大泣きをした。当時を思い返すと、私は先輩方のようなLAになろうと焦っていて、自分の強みばかりを人に見せていた（見せているつもりだった）。そのため、自分が一番認めたくない弱みがワークで露わになってしまった時、「LAに向いていないとばれてしまった。もうLAではいられないな」と思った。また、どこかでその弱みに気がついていながら、20年間受け容れてこなかった自分が情けなくて泣いた。しかし、最後のプレゼントカード交換で、弱みも含めて自分という存在を受け容れてくれる人達が周りにいることを知り、また泣いてしまった。

去年は、1年前の自分のようにすべてをさらけ出して泣いている後輩にもらい泣きをした。またYさんの涙を見てしまったことも原因だった。

そして今年。危ない場面はいくつかあったが、私は泣かなかった（え、最後泣いていたって？研修は18時までだったので、あれは含まれません（笑））。それよりも、ずっとにやにやしていた。初めて「自己の探求」を受けて、普段、見せない表情をしている後輩の顔を見ることができて、嬉しかった。ワーク中、いつもより少し頼もしく見える後輩がまぶしかった。休み時間にバカなことをしながらはしゃいでいる姿を愛おしいと思った。これから後輩達が創っていく、進化したLAを垣間見ることができたような気がして安心した。私の大好きな後輩を見て、「LAをしたいです」と言ってくれる1年生がいて幸せだと思った。来年はみんなどんな顔をしているのだろう。今からとてもワクワクする。

来年、私は社会人になる。Kさんからいただいたプレゼントカードの最後の言葉「これからも昇り続けてね」を胸に、「仕事ができない」と悔し泣きをしないでいいように頑張ろうと思う。

3年に亘って同じプログラムに参加する意義が実に明白です。来年度も「自己の探求Ⅰ」プログラムを実施し、LAの成長を支援したいと願っています。

中学生が関大で交渉学を体験！

報告者：山本 敏幸（教育推進部 教授）

2016年12月9日に大阪学芸中等教育学校の生徒19名が引率の先生2名と関西大学を訪れました。引率の先生のお名前は、金宮嗣允先生（関西大学文学部卒業（87））と豊島理沙先生でした。生徒達はこれまでに開催されてきた学問探究団「RYS」の催しの一環で、自由参加で本学を訪れたものです。

大阪学芸中等教育学校の担当者とのやり取りは増田優奈さん（文学部4年生）に担当してもらいました。ワークショップはLAの学生、増田優奈、大早亜美（商学部3年生）、山本彩加（商学部3年生）が中心となり、内容から運営まですべて行いました。

スケジュールは以下のようになります。

- 13:00 関西大学総合図書館・ワークショップエリアにて
あいさつと趣旨説明
- 13:30 キャンパスツアー
入試広報課の土井さんが担当、ツアー担当は佐々木さん（学生）
- 14:10 関西大学生による交渉学ワークショップ
「おとぎ話の登場人物の役割からみるwin-winの関係について考える」
- 16:00 終了

交渉学ワークショップでは、4つのグループに分かれ、桃太郎のおとぎ話の登場人物になりきり、コミュニケーション（なりきり記者会見）を通してそれぞれの登場人物のプロフィールを考え、ロールプレー・シミュレーション（模擬交渉）を行いました。生徒たちはwin-winの関係について体験型で学ぶことができました。



ワークショップの様子



模擬交渉の様子

体感！ 関大交渉学

～win-winについて考える～

関大交渉学 × 大阪学芸中等教育学校

うちの学校、12月に関西大学と
交渉学ワークショップをするんやって！

え、交渉学？
言葉はカッコいいけど難しそう…

そんなことないで！
講師は関大の学生さんやし、
日常生活で使える「体感型」
ワークショップやって！

へえ、そうなんかい！
そう聞くと楽しそうやね！

↓詳細はこんな感じ↓
日時：12月9日（金）13時～16時
場所：関西大学総合図書館
ワークショップエリア
内容：交渉学ワークショップ
& 関大キャンパスツアー
対象：1年生～5年生（50人まで）

あっ、キャンパスツアーもあるやん！
友達も誘ってみよかな

うんうん！一緒に「交渉学」しよ！

（お問い合わせ）参加希望者は 良本 完爾先生 まで

社会人対象の交渉学勉強会に学生が参加

報告者：山本 敏幸（教育推進部 教授）

2016年12月10日、富士ゼロックス福岡株式会社において、九州の博多地区の社会人の皆さんと本学、追手門学院大学の学生たちが交渉学勉強会に参加しました。今年で3年目の参加となります。学生たちは社会人と混合グループで交渉ワークのディスカッションをし、ロールプレイシミュレーション（模擬交渉）で交渉学的な実践的な能力を磨き合いました。

最後に、今時の大学生が、アクティブ・ラーニングの学習活動の一環で、どんな交渉学の学びをしているのかを社会人に対してプレゼンしました。関西大学からは上田綾香（文学部2年生）、迫琢磨（システム理工学部2年生）がクリティカルシンキングの授業での多者間交渉について、時の話題「TPP」をテーマに、自らが行ったワークの報告をしました。



富士ゼロックス福岡本社にて



研修の様子



模擬交渉の様子



模擬交渉後のふりかえりセッションの様子

第9回交渉学ワークショップ「交渉学をリードするブレインの育成(基礎編)」を開催

日時：2017年1月15日(日)10:00~17:00

場所：関西大学梅田キャンパス

参加者：22名

報告者：山本 敏幸 (教育推進部 教授)

2017年1月15日、極寒の雪の降る中、本学梅田センターで、交渉学のワークショップを行いました。今回は「交渉学をリードするブレインの育成(基礎編)」と題して、一般社会人(14名)、大学生(7名)、高校生(1名)合計22名が参加しました。

構成は午前の部と午後の部からなります。午前の部は、これまでに交渉学研修に数回参加し、交渉学のケース作成や交渉学ファシリテーターを目指す交渉学リーダー(社会人、学生)を対象に、交渉学のためのビジュアル・オーガナイザーを使ったケースデザインの研修とディスカッションを行いました。

午後の部は、交渉学について興味を持つ社会人、学生を対象に、交渉学のケース作成・ファシリテーターを目指す交渉学リーダー(本学のLA)が作成した日常生活の身近な交渉学コンテンツを使って、二者間及び三者間のwin-win交渉学の基本概念をロール・プレイも交えながら学びました。

交渉学ワークショップチラシ

会場での掲示ポスター(4点)

13:30 ~ 14:00	全体説明
14:00 ~ 14:50	サルでもわかる交渉学
15:00 ~ 15:50	交渉学:TPP (多者間の交渉)
16:00 ~	総括

「午前の部」

「午後の部」



三者間の交渉ロールプレイの様子

第10回交渉学ワークショップを開催

報告者：山本 敏幸 (教育推進部 教授)

2017年2月25日(土)に、関西大学 千里山キャンパスで、交渉学のワークショップを開催しました。学生発信の主体的なアクティブ・ラーニングを軸に教育開発支援センターの教員と職員が三者協働で企画しました。関西地区でのさらなる「交渉学」の普及、啓蒙活動の一環として開催してきている交渉学ワークショップも今回で10回目を向かえました。

午前の部、午後の部の二部構成で構成しました。午前の部は、特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会の亀井直人氏をお迎えし、「2030SDGsワーク」を通して、交渉学の礎となる俯瞰的なクリティカルシンキング、クリティカルリーディングによる判断力・意思決定能力を涵養するインタラクティブなワークを行いました。

午後の部は、「スタディスキルゼミの各科目」や「交渉学入門」「クリティカルシンキング」などの授業でラーニングアシスタントとして活躍する学生や受講生がチームを組み、交渉学の領域における広義のアクティブ・ラーニングをテーマに、学生が主体となってワークショップを実施しました。複数テーマのセッションを4つの開場で同時に開催しました。参加者のみなさんは関心のあるテーマを選んで回遊式で分科会に参加しました。



分科会名 担当者 一言紹介

- ・楽しみながら肌で感じる交渉学 木村 春陽 (文学部1年)
日常のありがちな出来事を例に、ワークを通して実際に交渉してもらい、交渉学を肌で感じてもらえればと思います！交渉をいくら学んでも実践できなければもったいない！交渉学を学んだことがないという方も大歓迎ですので、ぜひ参加してみてください。
- ・Learning Assistant 重山 航哉 (政策創造学部2年)
授業支援と聞いて何を想像しますか？出席をとったり、レジュメを配ったり？それだけじゃありません。今回のワークショップのほとんどは、このLearning Assistant(通称LA)によるもの。講義の中だけでなく外での活動もご紹介します。
- ・見方の違いを考える 永井 大貴 (環境都市工学部2年)
1/100に縮小された世界では、今までの常識では考えられないような、違った視点が生れます。人によって見える景色の違いを楽しみながら、ミニチュアな世界を体験してみませんか？
- ・人生をクリティカルシンキング 迫 琢磨 (システム理工学部2年)
皆さんは“人生”をどう捉えていますか？人が生きる？人と生きる？今回はクリティカルシンキングという考え方をを使い、あらゆる視点から“人生”について考えていきます。
- ・Paper Tower 馳平 一貴 (システム理工学部3年)
前半：体験型team building後半：企業経営に必要なのはチーム力か？個人の能力か？組織にとって必要なもの、要らないものを行動と理論を通じて理解していただくワークとなっています。
- ・ちゃれにゃんず 増田 優奈 (文学部4年)・高安 大貴 (文学部3年)
「+1」いい交渉へ踏み出せる「+1」新しい学びを得られる、そんなワークをご用意しました。アルバイトのCaseで身近な交渉学に触れたい方、コミュニケーションや状況把握、多数当事者間交渉に関心のある方、なにより楽しいことや真新しいものが好きな方は是非お越しください。
- ・恋する学問 松田 昇子 (政策創造学部4年)
学生が学生と授業を創っています。え、恋愛の授業？いえいえ、違います。「恋する」授業です。みなさんの「恋

する」を探しに来てください。

- ・いろあわせ 松岡 里奈 (政策創造学部4年)
誰かの新しい視点に触れてもらい、自分を見つめ直す1時間を提供します。この1時間を1年後思い出してもらえるような、お土産をご用意しておりますので、気軽に参加してみてください。
- ・接待プランを考えよう！ 結城 嗣斗・山田 大樹・山本 裕子(追手門学院大学)
深めて、広げろ～！最高の接待プランを考えてみよう！みなさん気軽に是非参加してみてください☆キラッ
- ・サルでもわかる交渉学 眞鍋 均之介(大学院修了生)
"交渉"とは何でしょうか？意外と身近なものかもしれません。本ワークショップを通じ、"交渉"への理解を深めてみませんか？

参加者数は、午前の部は、学生31名、一般社会人15名、本学大学教員・職員 15名、合計62名でした。午後の部は、新たに一般社会人(2)、本学大学教員・職員(1)、高校の先生(1)、高校生(2)、大学生(3)の参加者が8名加わり、分科会参加者合計数は、127名でした。内訳は以下の通りです。

- ① セッション×3の合計受講者：39名 学生講師陣：8名
- ② セッション×4の合計受講者：45名 学生講師陣：8名
- ③ セッション×3の合計受講者：43名 学生講師陣：5名

午前の部の様子



開会のあいさつ (重山くん)



(亀井氏)



午後の部 分科会の様子



Learning Assistant
重山 航哉 (政策創造学部 2年)



いろあわせ
松岡 里奈 (政策創造学部 4年)



Paper Tower
馳平 一貴 (システム理工学部 3年)



恋する学問
松田 昇子 (政策創造学部 4年)



楽しみながら肌で感じる交渉学
木村 春陽 (文学部 1年)



接待プランを考えよう！
結城 嗣斗・山田 大樹・山本 裕子 (追手門学院大学)



ちゃれにゃんず
増田 優奈 (文学部 4年)・高安 大貴 (文学部 3年)



サルでもわかる交渉学
眞鍋 均之介 (大学院修了生)



人生をクリティカルシンキング
迫 琢磨 (システム理工学部 2年)



見方の違いを考える
永井 大貴 (環境都市工学部 2年)

「学生がつくる新聞」で今学年度お世話になった毎日新聞社からも取材に来られておりました。
以下、亀井氏の感想メールです。

関西大学 山本様
追手門学院大学 田上様
CC: 上田さん

亀井です、土曜日は大変お世話になりました。
御礼のご連絡と、いくつかお願いをさせていただきます。
まず、平日頃はゼロックスへのご支援を、ほんとうにありがとうございます。
今回は、組織名こそ表に出さないかわり方でしたが、ゼロックスの一員として御礼申し上げます。
みなさんがこれまで積み重ねてこられた繋がりに交わることで、
私も西日本地域のゼロックスメンバーと会うことができました。
私にとっての新たなつながりをいただいたこと、こちらも改めて感謝しています。
そして土曜日のイベントが無事に終わられたこと、とても嬉しく感じています。
1日という、まさにあつという間のことでした。
その短い時間でしたが、感じたことはとても多くあります。
関西大学さまの素晴らしい取り組みと、継続して推進されている山本先生や田上先生。
代々と引き継がれていく志を持ったlearning assistantのみなさま。
そして場で学び続ける参加者みなさま。
皆様の居る場が、広い地域の学びの場として機能しているのを感じました。
ちょっと離れた土地にいますが、これからも関わり合いを持たせていただけると嬉しいです。
まずはお礼まで。

第15回関西大学FDフォーラムを開催

日時：2016年8月8日（月）14：00～16：00

場所：第2学舎1号館5階A503教室

参加者：43名

報告者：森 朋子（教育推進部 教授）

2016年8月8日（月）に、関西大学千里山キャンパスで第15回関西大学FDフォーラム「大学入試改革を考える - 高大接続の観点から -」を開催しました。講師として、大阪大学高等教育・入試研究開発センター長で文部科学省中央教育審議会大学分科会等の委員も務められる川嶋天津夫先生をお迎えし、高大接続に関するホットトピックである大学入試改革について、これまでの議論、さらにはこれからの展開についてご講演いただき、その後、フロアからの質問にパネルディスカッション形式でお答えいただきながら、単なる選抜機能システムの変更ではない、小学校から大学までの一体化改革の全体像について情報提供いただきました。当日は暑い最中、43名の外部参加をいただき、フォーラム内も熱い議論に湧きました。事後アンケートでは参加者からは「その意義が明快になった」「不安が払しょくされた」などのご意見をいただき、大学のみならず、教育内容や方法の接続といった真の高大接続という新たな領域に、今後、関西大学教育推進部も一歩を踏み出した時間でした。



当日の様子

交渉学・クリティカルシンキングの要素を取り入れた授業の実践

報告者：三浦 真琴（教育推進部 教授）

1. クリティカルシンキングに関する3種類の科目

報告者は、かねてより、どの科目においても学生が批判的な思考を自然にできるように、工夫を施しながら働きかけている。今回のAPの取組において、クリティカルシンキングに特化した科目、あるいはそれを他の活動・営為に応用するための科目が創設されたのを機に、今までどちらかという暗示的に伝えていたものを明示的に伝えることの是非（あるいは可否）について振り返り、次年度以降の授業展開への足がかりとしたい。

現時点で報告者が担当しているのは「ピア・サポートのためのクリティカルシンキング」（春学期開講）、「スタディスキルゼミ（クリティカルシンキング）」（春秋学期開講）、「共通教養ゼミ」（秋学期開講）の3クラスである。そのいずれにおいてもクリティカルシンキングを「情報を分析、吟味して、創造的・建設的に取り入れ、次のステップに必要な情報を獲得もしくは創造すること」として捉えることにしている。そして、このような情報の解釈・文脈の理解を実践するために、自己の解釈や理解の癖を知り、加えて世間一般的なスキーマから自己を解放すること、その上で建設的で創造的な解決のために何が必要かを考えることが必要不可欠であると考え、そのいずれをも学生に体験し、省察の材料とすることを目指している。上述の3科目のうち、前者は、かかる体験を経て自らのうちに培った批判的思考をピア・サポートへの活用する応用力を目指すものであるため、スタディスキルゼミ（クリティカルシンキング）を履修済みであることが望まれる。同様のことが2年次以上の学生を対象とした「共通教養ゼミ（クリティカルシンキング）」にも該当するが、この両者に受講生はクリティカルシンキングに関して初学者ばかりであった。以下に、シラバスの概要を示すとともに、実際の授業において、受講生の姿勢や意欲、態度に応じて、弾力的な運用をせざるを得なかった点について言及していく。

2. クリティカルシンキングをツールやスキルであると誤解する学生たち

クリティカルシンキングは批判的思考と翻訳されるが、シラバスに明記してあるにもかかわらず、「批判」と「批評」とを混同する学生が多い。あるいは「シンキング」、すなわち思考は行動、営為、あるいは状態、場合によっては姿勢の意味を内包する言葉・概念であるのに、これを批判するためのツールであると安易に捉えようとする学生も散見される。科目名にクリティカルシンキングを謳っていない従来の科目においては、クリティカルシンキングという言葉を用いていないことによって、存外、クリティカルシンキングをつつがなく展開することができたのだと思い当たるが、批評、そのためのツールという先入観、固定観念を抱いた学生をそれより解放することが、新設科目の当初の目標とならざるを得なかった。とはいえ、学生が抱いているクリティカルシンキングのイメージを否定するのではなく、その全てを受け容れ、多様な解釈が可能である（と考えることもクリティカルシンキングにとって大切なスタンスである）ということをまずは伝えることにした。その上で、授業が始まる半年以上も前に編んだシラバスを適宜修正しながら、授業展開することにした。半年以上も前に作成したシラバス通りに授業を展開できるのは、そのシラバスが完璧なものであるか、もしくは、その半年の間に何の変化もないか、そのいずれかである。報告者は、クリティカルシンキングに関する情報や知見、あるいはそれを促すためのツールやメソッドを新たに蓄積していたので、それを授業において活用することにしたのである。

3. 学生をクリティカルシンカーへと育てる試み

「ピア・サポートのためのクリティカルシンキング」を除く2科目のシラバスでは、授業概要として「クリティカルシンキングは日本語に翻訳すると「批判的思考」です。しかし残念なことに我が国においては「批判（的）」と「批評（的）」とがしばしば混同されています。時と場合によっては「非難」あるいは「否定」の意味で用いられてしまうこともあります。この言葉あるいは概念本来の意味するところは「情報を分析、吟味して、創造的・建設的に取り入れ、次のステップに必要な情報を獲得もしくは創造すること」です。ここでは冷静で客観的な理解があらゆる所作・営為の基盤となります。このような情報の解釈・文脈の理解を目指すために、自己の解釈や

理解の癖を知り、加えて世間一般的なスキーマから自己を解放すること、その上で建設的で創造的な解決のために何が必要かを考えることが必要不可欠です。この基本的なことがらを学ぶことがこの科目の重要なねらいとなります」と謳い、達成目標として「前に（明示・暗示のいかんを問わず）提示された情報が、その事象の全体にとって、いかほどの割合を占めるものであるのか、それを適切に判断（あるいは推測）するための力を育みます。／自身の知る情報が、当該事象のどれほどを説明するものであるのかを的確に判断する力を培います。／ある事象を深く正しく理解するに当たり、必要不可欠とされる情報を獲得するために、当事者間において、どのようなコミュニケーションが必要であるのか、それを理解し、ついには実践して、それを獲得・入手する力を養います。」

表1 半年以上前に作成したシラバスの内容

第1回	Introduction + Grouping
第2回	自分の「思考の癖」を知る
第3回	世間の「思考の癖」を知る
第4回	「スキーマ」とは何か／スキーマからの解放を目指して
第5回	グループワークの効果を知る (Part I)
第6回	グループワークの効果を知る (Part II)
第7回	実践で確かめよう(1)
第8回	実践で確かめよう(2)
第9回	確かめたことをグループワークに反映させる(1)
第10回	確かめたことをグループワークに反映させる(2)
第11回	確かめたことをグループワークに反映させる(3)
第12回	グループワークに反映させたことを発表しよう(1)
第13回	グループワークに反映させたことを発表しよう(2)
第14回	グループワークに反映させたことを発表しよう(3)
第15回	総括

この内容自体に不足はないかもしれないが、どちらかといえばtheory-orientedな印象や教師による予定調和が見え隠れする感が否めない。そこで、述べたように、学生がのびのびと試行錯誤を繰り返し、次第にクリティカルシンキングのスタンスや習慣を身につけられるように、各回のコンテンツを見直すことにした。それを表2に示す。

第1回目の授業では、四字熟語を一字ずつ解体したものをカードとして用い、そこに四字熟語を形作らない文字を複数混ぜ、一人が二枚ずつの文字カードを持ちながら、四字熟語を形成する仲間を探してグループを構成するというワークをした。その後、A6サイズの白紙に四角形と円を三つ描くだけのワークを通して、認知差がいつもたやすく発生することを体験してもらった。以後、「ナンプレ」(ナンバープレイス・数独)の原理を理解して、その問題を自作してもらうことを予定していたので、簡単な問題を数問、解いてもらった。

表2 クラスの雰囲気に合わせて(クラスの雰囲気を盛り上げるために)修正した内容

回	月日	内容	回	月日	内容
1	9/27	・グルーピング(四字熟語を分解して)・チームネーミング・ナンプレ・四角と丸を用いた「認知差体験」	8	11/15	・コミュニケーションゲーム「アイドルをさがせ」
2	10/4	・クリシナンプレ体験	9	11/22	・アイドルをさがせ(再放送)
3	10/11	・赤白帽子・ナンプレ作成編	10	11/29	・文書伝達ゲーム
4	10/18	・「私は犬です」を複数の英文に・野球のポジション当てゲーム	11	12/6	・支配人当てゲーム
5	10/25	・コンセンサスゲーム: 砂漠で遭難したら	12	12/13	・アセンブリーゲーム
6	11/1	・多数決に頼らない意志決定・可能な限り選択肢を増やす体験(クロスロードゲーム)	13	12/20	・ビルディングゲーム

7	11/8	・Master Mind ・的当てゲーム	14	1/10	・フェルミ推定(予定)
			15	1/17	・ハンターゲーム

その授業への感想を以下に示す。

第1回目の感想(レポートより、一部抜粋)

- ◇教職概説の授業がとても楽しくて、クリティカルシンキングもとらせていただきました。クリティカルシンキングと名前はとてもむずかしそうで、ビビっていましたが、想像以上にあたたかい雰囲気の授業でよかったです!!これからの楽しみです。ナンプレはまりそうです。半年間よろしくおねがいします。(陽菜)
 - ◇春学期に先生の講義を受けて、秋も先生の授業を探しました。四字熟語から始まり、終わりはナンプレ。90分あつという間でした。□と○を書いてみて、自分にはない発想をする人が身近にいることを、分かっていたつもりでしたが、実感してとても楽しかったです。認知度は皆違うということを実感したことで、よりなるほどなあと思えました!(りん)
 - ◇はじめに「クリティカルシンキングとは」という質問に対して一人一人違う意見が出ました。みんな自分の思う正解を考え、それを発表したのだと思いますが、どれも間違っていない、どれも正解だということを三浦先生がおっしゃってくれたので、この授業でのびのびと発表しやすくなったように感じました。同じ指示を受けて描いた図形がみんな違うように、これからのグループワークでも様々な違った意見があると思いますが、それを上手に受け容れていけるようにがんばります。(遼)
 - ◇先生がシンプルに図を書いて下さいって言うだけで、班の4人でも大きさや形が違うので、人間の想像力はそれぞれ違っておもしろいと思いました。ナンプレは初めてやりましたが、数字を埋められた時の嬉しさに、はまってしまいました。(玲奈)
 - ◇図形以外にも様々な所で違いが見つけられて意外に思った。好きな物事や、何が得意か、以外のことで考え方に変化が出てくると思っていなかったの、人と話す時に気をつけることを増やしていこうと思った。(輝清)
- 第2回目の授業では、単にマスに数字を埋めていくだけではなく、その他の情報とクロスさせなければ解けないナンプレ(クリシナンプレと呼ぶもの)を学生に体験してもらった。学生の間にはかなりの戸惑いが見られたが、後々のことを考え、いささか早いとは思いつつもハードルを高くした。また、ナンプレの作り方を理解するために、簡単な問題を一つ用意して、作成のプロセスを理解してもらうように働きかけた。

第2回目の感想(レポートより、一部抜粋)

- ◇クリシナンプレ#3がまったくわかりません。そしてナンプレのせいで気付けば時間が迫っており、この感想を書く時間がありません(笑)。さきほどのナンプレですが、三浦先生は数式を使ってみたらという助言をくれました。これはナンプレだけを見て視野が狭くなっていることを指摘されたのだと思います。こういう場面でも自分にはまだまだクリティカルシンキングができていないということを痛感させられました。(隆人)
- ◇前回の講義で、ナンプレを解く難しさと快感を知り、少しはまってしまいました。しかし、今日はナンプレを作る側ということで、奮闘はしましたが、理解できないところもあり、制作者側の大変さを少し見たような心地です。グループのメンバーと、これは違う、こうではないかと言ったり、自分の意見を説明したり、また説明を聞いたり、そうした中であつくなってしまうことがありました。年の差も忘れて、失礼なことを言ってしまったかもしれません…。しかし、話し合う中でグループの仲は深まったと思います。楽しかったです。(陽菜)
- ◇ナンプレを解くのではなく、「作る」ってなると、解くよりもものすごく頭を使うのだと思いました。どこの数字を確定させるかによって、全然、違うナンプレが完成したりするのだと分かって、ナンプレって奥が深いと思いました。班の皆が、頭の回転の速い子ばかりで、いつも意見をたくさん言ってくれるので、とても作業が早く進むなと感じています。自分も聞いているばかりでなく、もっと頭で考えて、色々な考えを出していけたらいいなと思っています。今日やったナンプレの続き、是非、来週やりたいです!クリティカルシンキングにナンプレは必要だけど、ナンプレができるようになったからと言って、クリティカルシンキングができるわけではないという先生の言葉の意味が分かるようになっていきました。たぶん、ナンプレをしていく中で「ああでもない、こうでもない」「ここをこうしたら」という風に、お互いの意見を受け止めながら、もっとこうしたらいいという考えを出していくから、ナンプレをすれば、クリティカルな考えが生まれると思います。(玲奈)

第3回目は、いよいよナンプレ問題の作成である。いつも必ずスムーズに解けるわけではないナンプレの問題をルールを一つ追加して作成するのは、骨の折れる作業であったに違いないが、学生は苦勞しながらも楽しんでくれたようである。

第3回目の感想（レポートより、一部抜粋）

- ◇単純にナンプレを作るのではなく、4つ目のルールを増やして考えるのは面白かったです。隆人くんのピラミッドのアイデアの良さ(?)が光りました。これからはナンプレを家族や友達に作って解いてもらおうかなと思いました。次の授業から何をするのか楽しみ+作ったナンプレがちゃんと解けるものになっているか心配です(笑)。あと先生が毎回クラスの感想をまとめて通信を作っている心遣いにはいつも驚いています。大学でこんなことをしてくれる先生はいないので、すごいなあと思いました。これからも楽しみにしています!(唯)
- ◇ナンプレ完成しました!!すごく試行錯誤しました。特に私は瞬時に「どこに何が入ったらここが埋まる」というのが判断できなくて、毎度、説明してもらっていました。けれど、一回だけ、皆が気付かなかった部分に気付くことができ、ちょっとうれしかったです。ナンプレが今回で終わりなのはさみしいですが、これからどんなことでクリティカルシンキングするのか、とても楽しみです。もう少し「ひらめき」の力をつけたいです!!どうやったら「ひらめき」の力がつくのでしょうか。(玲奈)
- ◇簡単には解かせたくないという気持ちのせいで、なかなか埋めるところが決まらず、苦勞しました。難しい問題を作るのは、難しい問題を解くより難しいのだと実感しました。(優介)
- ◇スタスキクリシン通信は、先生と私たちとのコミュニケーションだけでなく、メンバーが班での活動をどんな風に思っているかを知る機会になります。食事に行きたいなんて、直接言ってくれればいいのに!!まだLINEも知らないのに!!半年間でどれほどの仲になれるか本当に楽しみです。ナンプレ完成しました!みんなの知恵を絞った結果です。疲れました意外と…。みんなの班のを解くのも楽しみです。(梨絵)

第4回目以降、ある事象に関する情報をグループメンバーが別個に所有しているという状況のもとで、いかにしたら、それをメンバー間で共有できるのか、伝える際に「認知差」が発生しないようにするためには、何に留意すればよいのか、そういったことに心を砕きながらのワークを体験してもらった。各回のコンテンツを事細かに説明すると煩雑になってしまうので、以下、各回の学生のレポートを抜粋して示すことにする。

第4回目の感想（レポートより、一部抜粋）

- ◇野球チームのメンバーを決める時は、一見いらなさそうな情報が実は大いに役に立ったりして、私はそのことにまったく気づかず、視野がまだまだ狭いことに気づきました。犬の英作文では、高校一年生の時に頭がすしの形をしているとおちよくられていた先生が「私は『すし』です」と言って笑われたところで「これは店先で注文する時に発言することもある」と言っていたのを思い出して、言葉は状況によって意味が変化するのではないかと思ったのがきっかけですらすらと書き進めることができました。過去のほんのささいなことでも、これから起こる問題の解決の糸口になるということを感じることができました。私は小さなことを気にして覚えてしまう性格で、これはよくないことだと思っていました。今回のように役立つこともあるので、あながち悪くもないと思えました。(隆人)
- ◇野球のメンバー当では、探偵ごっこみたいでとてもおもしろかったです。情報を相関図のようにして書き出しましたが、表を使った方が簡単に整理して解けたなと思いました。また授業の最初の正面図・側面図も、きつと立方体ではなく、球みたいな立体なんだろうというところまでは考えましたが、あと一歩でした。最後に「私は犬です」の英文も、ふざけて「こういう場合でも犬ですっていいそう!」って思ったのが、方向性あって驚きました。クリティカルシンキングって、あらゆる可能性を考えて、自分の固定観念を崩していくものだなあと感じました。なんとなく頭がやわらかくなった気がします。これからもどんなゲームで頭を動かすのか楽しみです。*前回のナンプレ“I”の位置を一つ左にずらして下さい。書き間違えました。(唯)
- ◇野球のポジション当てゲームでは、限られた情報をいかに有効的に使えるかがカギでした。一見すると必要ないように見える情報でも、よく考えれば必要な情報だと気付いたときは、「お〜!」と声を漏らしてしまいました(例:Aさんはサードと仲が良い→Aさんはサードではない)。こうして選手のポジションをしぼっていくのが楽しかったです。チームメンバーとの会話で、どんな情報を引き出せるか。とても興奮して、眠気が覚めました(笑)。「私は犬です」では、日本語は状況次第で、いろんな解釈にもなれることを知りました。普段の生活でこれを無意識に使っていたんだな〜(´w´)(光)

第5回目の感想（レポートより、一部抜粋）

- ◇遭難した時用の品物を決める時、私は一番に鉱山キャンプに行かないといけなと考えました。しかし、グループで話し合ってみると、助けを待つ派が多く、主張を聞いて私の考えは変わりました。冷静に考えてみると、砂漠で60kmも歩けるわけ、ありませんでした。考え続けて、何度も話し合っ出たグループ決定は、妥当解と大きくズレていたり、使い方も異なっていたものがとても多くありましたが、グループ全員が、自身の解答よりグループ解答の方が誤差が小さくなりました。グループの力ってすごいと思いました!!!また、私はコートが必要だと言いつつ、なんとか納得をもらったのですが、その答えがあっていたこともうれしかったです。主張することと、ほかの人の意見を受け入れる両方の姿勢を持ち合わせる事が重要だと思いました。(陽菜)
- ◇この班で話し始めるとき、まず、その場で救助を待つか、鉱山を目指して進むかというのを決定せずに話し合いをしてしまい、結果的に歩きながら救助に光やパラシュートで示すというふうになりました。この時点で、持ち出す順位が答えと誤差が大きく出ってしまったのだと思いました。食塩は絶対いると班で一致していたけれど、意外と食塩がいらないと知ってびっくりしました。班で話し合っている中で、それぞれの班の人の話を聞いて、色々な考え方がありました。自分の考えが、班の人によって変化していくのがおもしろいと感じました。次回もどんなことで話し合えるか、楽しみです。班の人が自分の意見を聞いてくれたりしてうれしかったです。先生に性格が出ているといわれたので、先生は私がどんな性格のイメージなのか、知りたいです笑。(玲奈)
- ◇グループ内で待つ派と移動する派に分かれて、そこから意見を出し合っ、一つの事に決めていく過程がとても刺激的でした。こういう用途で選んでいたのか、と思うことで、様々な見方が出来るようになった気がします。グループ効果が低めだったので、話し合い方を変えてみようと思います。(優介)

第6回目の感想（レポートより、一部抜粋）

- ◇問題が挙げられたときに、結論を急ぐのではなくて、状況をよく見ることの大切さを実感しました。災害といっても、様々な種類があるし、そういった広い視野を持って考えることで、たくさんの選択肢が生まれ、可能性が広がっていくんだと思いました。初回の授業の頃よりはクリティカルシンキングについて少しずつ分かってきているような気がします。人と話すことで、よりよい答えに近づいていくような気がします。(陽菜)
- ◇結論を出すことを急ぐのではなく、まず状況を見ることが大切だと実感したし、選択肢が多いほうがいい選択ができるかもしれないということを私たちはすぐに忘れてしまふなあと思いました。何より急がないこと、お互いの意見を聴いて考える時間を軽視しないこと、大切にしたいです。“聴くこと”と“待つこと”は似ているなあと思いました。(りん)
- ◇班のみんなと話し合っていると、自分の考えの狭さや、どれだけスキーマにとらわれているかがよくわかります。自分が何かクリティカルな意見を出せたときは、いつだって班のメンバーに助けられたときです。自分ひとりで考えるときは、割と人一倍視野が狭く、班のメンバーの意見に磨かれて、やっとうい意見を出せます。でも、いつだって、このメンバーでものを考えられるわけでもないし、一人でもしっかりクリティカルに考えられるようにしていこうと思ひ、今日もみんなでご飯を食べに行こうと言ひすることができない自分でした。それはそうと、今日も楽しかったです。(遼)
- ◇一人ではわからなかったことも、班や全員で考えることで、見えなかったこともたくさん出てきて、話の内容に厚みが出てくるのが実感できて楽しかったです。選択は選ぶものがあるから選択できるんですね。選ぶものが多い方が話はずも盛り上がります。今回はそんなに楽しくなるような題ではありませんでしたが、話している間に選ぶものが増えて、盛り上がるのは大切だと感じました。(久仁子)

第7回目の感想（レポートより、一部抜粋）

- ◇今日の授業では、自分の勘がさえていたなと感じました。紙と鉛筆があればできるゲームは地味かもしれませんが、みんなが平等に楽しめるゲームだと思いました。Master Mindをやっ、高校の時にクラスの男子がやっ、ていて、すごく盛り上がっていたことを思い出しました。とても楽しかったです。的当てゲームは、本気でボールを的に向かって投げるものだと思ひていました。笑 結構、本気で教室にいつのが用意されるのかと思ひて見渡してました。的当てゲームは他の班的番号と結果の点数を聞いてから言えば、もうちょっと点数を獲れたと思ひました。2つのゲームともに「かけひき」が大事だったのでハラハラしました。(玲奈)

- ◇抽象から具体へ、的当てゲームに急に入ったらきつとわけが分からずにいたと思いました。数当てゲームから入ったので、まだ考えられたように思います。とても楽しかったです。あと、子どもとするときは、たまに負けてあげる、さらっとおっしゃっていましたが、それってとても大切ですよね。数ヶ月前に身をもって学んだことがあったので、とても共感しました。(奈津子)
- ◇的当てゲームがとても面白かったです。他の班との駆け引きや、的の場所を予想する事が大切で、他の班が高得点を出したら、冒険をせずに同じところを打つのも一つの手だなあと思いました。最初にどこに打って情報を知るか、それとも相手の打つ後に打つかなど、戦略はいくらでもあるなと思いました。(一沙)

第8回目の感想 (レポートより、一部抜粋)

- ◇野球版よりも、しっかり考えなくてはいけない問題でした。そして、非常に難しい問題でした。カードの枚数が多いのもそうですが、野球のように、あらかじめポジション以外が決まっているわけではなく、旅館の間取り、位置から決めなければならないことが難しいポイントでした(結局、間違えましたww)。旅館の間取り以外は合っていたので、来週、解き直します。(光)
- ◇いつもは問題が解けてすっきりした気分で授業を終えることができるのに、今日は解けなくて、解けそうにもなくて、とてもモヤモヤしています。色々な観点から見たつもりですが、間取りが定まりません。しかし、今日の調子で来週また時間をとってもらっても答えは出ないと思います。考え方に問題があり、固定的に見すぎている、思わぬところで落とし穴にはまっている気がするので、考え方を一新して再チャレンジしたいです。(陽菜)
- ◇今日は始まる前に、先生に「君たちは気づかぬうちにクリティカルな考え方ができるようになっている！」と言っていたので、いつもの3倍ほど気合を入れてのぞんだのですが、時間内に答えを出すことはできませんでした。自分たちのチームは考えているうちに別の方向に暴走していってしまうことが多いのですが、チームとしてのまとまりはどこにも負けていないと思っています。楽しみながらも、しっかりと結論にたどりつくことができる、すてきなチームにしていきたいです。いや、します。(遼)
- ◇今日の問題は、廊下の形状とか、中庭の形、部屋の形など、不確かなものがすごく多い中、情報を形にしているのがとても楽しかったです。私はこの班の魅力をなんでもないことを深く考えられるところだと思っています。だからこそ毎回楽しんで帰れるし、仲よくなれるんだと思います。来週がんばるぞ！(梨絵)

第9回目の感想 (レポートより、一部抜粋)

- ◇やっとできました!!! しょうぶの部屋がまず定まったところから糸口が見つかって、そこからはスルスル一つ一つ解けていきました。ろうかを部屋が挟んでいるという発想が出たときは、最高に気持ちよくなって、パズルのピースがはまるってこういうことか!! 気持ちいい!! となってなりました。一週間前にはどこから始めればいいのかわからなかった問題が、今日はとっかかりが一つ見つかっただけで、スルスルと解けるのはおもしろいなと思いました。(りん)
- ◇今までのゲームの中で、一番解くのに苦労したので、解けた時の喜び、爽快感も史上最高のものでした。もう一度、書き出し、試行錯誤を繰り返しているうちに、前回には見えなかったものが見えてきました。中庭の条件を、固定観念から抜け出してやわらかい頭で考えられたのが勝因だと思います!!! 解き終わった後に、もう一度文章を読むと、何でわからなかったのかと疑うくらい明確に書かれていました。情報を正しく認識する難しさといろんな方法で考える大切さを実感しました!!! うれしいです!!!! (陽菜)

第10回目の感想 (レポートより、一部抜粋)

- ◇文書伝達ゲームでは、また一つのスキーマにかかっていた。共通する図形は一つであるという思い込みにかかっていた。この思い込みを直してくれたのが他のグループの「情報メモ」でした! 今回は競争ではなく、協力という形で進んでいったので、なんだかほっこりした気分でした。笑。話は少し戻りますが、今回の課題の第一段階では欲しかったカードが逆に余ったりするなど、伝達のタイミングが難しかったです。状況を見ながら伝達をするのも視野の広さが求められていると感じました。(隆人)
- ◇今日はグループ内だけでなく、他に発信して答えを見つけないという斬新で楽しかったです!!! 今まではグループ対抗でしたが、今回は答えを見つけないために、他のグループから、これじゃないかなとメッセージをもらったり、ねぎらいの言葉が来たりしたので、温かい気持ちになりました。全員の力でゴールを見つけること

ができて良かったです。相手に働きかけるのも大切ですが、時には待って見極めることも重要だと感じました。また、このような穏やかなゲームもしたいです。(陽菜)

- ◇伝達ゲーム、ただ不足している図形だけを手紙で送るのではなく、この班の感受性の豊かさが出て、目標カードの情報を送るという発想が生まれたことが、何か嬉しかったです! 一番最初に、全班の共通のカードを見つければよかったのも達成感がありました。自分の班だけでなく、全ての班のことも考える授業だったので、こういうクリティカルな活動も、グループ活動などに役立つと思いました。はるのバンドのBGM、いい感じでした。笑。こうやって自分の好きなことに一生懸命やって目標持っているのはすごいなと思いました。あと、先生LINEを交換して頂いてありがとうございました! LINE待ってます! (玲奈)

第11回目の感想 (レポートより、一部抜粋)

- ◇必要な情報と不必要な情報とを区別するスキルがいたと思った。今日はいつもと違うメンバーで完成するか不安であったが、むしろいつもよりすんなり進んだ気がする。(凜太郎)
- ◇今日は班がばらばらになって初めてのチームで不安もあったのですが、答えまで辿り着くことができたのでよかったです! ! 旅館の問題でとても苦戦したことを思い出しました(笑)。多分、そのおかげで今回もスムーズに答えが出たと思います。私の個人的な反省点は、まとめるのがわかりにくすぎたことです(笑)。シンプルに必要な情報だけを紙に書けるようにしたいです。(瑞季)
- ◇いつもと違ったメンバーで、とても緊張したけれど、皆、これまでの授業で培った経験を活かして、遅くなったけど、問題を解決することが出来ました。いつものワークと違い、とても新鮮でした。(優介)

第12回目の感想 (レポートより、一部抜粋)

- ◇今回の課題で、私は会話できることのありがたさを知ることができました(笑)。人に伝えることができないということが、こんなにもどろっこしいということを実感しました。会話ができないという状況で、伝えることばかりに集中して、受信することを忘れていたので、受信、聞くことが大切だと思いました。「コミュニケーションで大切なことは聞くこと」、前回、三浦さんに言われたことを、このような困難な状況だからこそ痛感することができました。(隆人)
- ◇今回いらだちがかなり出てしまいました(笑)。言葉を発することができないことと、発さなくてもジェスチャーもだめということだったので、もどかしい気持ちになりました。言葉を伝えることの大切さを改めて感じました。クリティカルシンキング史上、一番難しかったです!! (笑)。グループワークの中でコミュニケーションをとることが重要なのに、そのコミュニケーションを奪ってしまったら、どうグループワークしたらいいのかと悩まされました。(瑞季)
- ◇いつも自分の班は、そんなにイライラする人がいませんが、今日のメンバーはせっかちさんがいて、場がピリピリするのを避けたくて、雰囲気作りを大切にしようと、途中から思いました。ルールを完全に守ってのこのゲームは相当むずかしいっ! ! と思いました。途中で皆あきらめはじめていくけど、人のピースさわったらあかんし…がんばろうとも言えへんし…あぁー!!! みんな集中一つ!!! って言いたかったです。(久仁子)

第13回目の感想 (レポートより、一部抜粋)

- ◇チームの振り返り! そういえばこうやったな~って思い出して楽しかったです。いざ振り返ってみると、そういえば考え方や、毎回の課題の取り組み方が落ち着いたように思います。焦らなくなったというか。解き始める前に考えるべきことは何なのか、きちんと準備するようになった気がします。待つこと、聴くこと、大切にしたいことが増えて、嬉しいです。おかしもおいしいし。冬のチョコは夏のアイスぐらいおいしいです。ごちそうさまでした。(りん)
- ◇メリークリスマス!! 今日で今年最後のクリティカルシンキングです。思えば秋学期最初の授業、すっごく緊張していました。それがどうでしょう、こんなに騒いで、ほんとうに緊張していたのかな、ずっと前から友達だったんじゃないかな、そう思えるまでになりました。『恋する日本語』という本に“淡治(しょうこう)”という言葉が載っていて、この言葉の意味は“心がうちとけること”だそうです。この本の作者さんは「日本語とは恋をするために生まれた言語なのだ」と言ってもらえました。心がうちとけた“淡治”な状態の私たちは、きつとこの授業に恋をしているのだと思います。よいお年を。(梨絵)
- ◇半年間、振り返って班のメンバーの成長を感じることができた。初めて会ったときは、皆、おとなしい性格の

子が多かったので、グループで話し合うことなく、個人で課題をこなしていたが、回を重ねるごとに心を開くようになり、最近は授業前もずっと話している。(凜太郎)

この報告書を作成したのは、13回目の授業が終えた後であるが、13回の授業を通して、少しずつ自分の中にクリティカルシンキングという姿勢や習慣が培われていることを意識できるようになっている。シラバスに記載した内容ではなく、クラスの雰囲気を見て、そのコンテンツを臨機応変に修正したこと、そこにゲーミフィケーションの要素を存分に盛り込んだこと、クリティカルシンキングとは何ぞやというような概念的な説明をしなかったこと、その全てが奏功したように感じている。

次年度以降、さらにブラッシュアップした授業をデザインし、グループワークを苦手とする学生がいても、じっくりものを観察したり、考察したりする経験の乏しい学生がいても、終盤にはクリティカルシンキングを楽しめるようにしていきたいと思う。なお、次回は、今回、報告の対象としなかった他の二科目（のいずれか）について、報告をする予定である。

園田学園女子大学のLAとの交流

報告者：三浦 真琴（教育推進部 教授）

昨年に引き続き、園田学園女子大学のLAとの交流が継続しています。本学のTA（学部生時代にはLAとして活動）が園田学園女子大学のFD委員やLAの顧問として活動するかたわら、今年も本学のLAが出張してLA研修活動に参加しました。以下に、活動に関わっている学生の報告を記載します。

園田学園女子大学 学生FD委員のTA介入について（経緯）

園田学園女子大学で週に一回、TAとして勤務している。学生FD委員会の運営をサポートすることを目的に、学生FD委員会の会議に出席することが主な勤務内容である。学生FD委員会は現在、十二名の委員で活動しており、「よりよい大学にするためにはどうすればよieldろうか」ということを念頭に置き、企画案や活動周知の方法を会議で考えている。しかし、委員会を支える年代である三年生が少なく、会議も毎回は出席できないという現状から、昨年委員会が行ったことをなぞるだけという形になり、張り合いがないという声から下級生からあがっていた。これまで関西大学でのLA研修への参加も促してはいたが、都合がつかずに参加できない委員が多かった。そこで、「園田学園女子大学で研修を行い、そこに関西大学のLAに参加してもらえばいいのでは」ということを提案し、それが開催されたことが今までの勤務で大きく印象に残っている。グループワークを体験したことのない下級生に楽しかったと言ってもらえたうえに、関西大学のLAとも交流が深まったようで、合同研修を企画しようという話が出ていると聞いて、少しは委員会向上の役に立てたのかもしれないと嬉しかった。これから委員会がどうなっていくか、引き続き楽しみながらサポートしていきたいと思う。

園田学園女子大学 学生FD委員のTA介入について（感想）

園田での勤務が決まったとき、正直自信がありませんでした。そして今も自信がないまま勤務しています。三年もLAを経験しましたがファシリテーションが上手いわけでもないし、論理的に話すことが得意なわけでもありません。園田のFD委員の中には関大の研修に来てくれていた学生さんもいたので顔見知りがあったのはありがたかったですが、制度ややり方など関大と違うことがたくさんあって戸惑いました。

そして何より、関大で勤務するときより責任を感じました。もちろん関大での勤務に責任を持っていないというわけでは決してありません。ですが、関大LAのように担当の先生もいないし、あの中では私が最も三浦先生との付き合いが長いので、「園田では私が先生代わりということなのだろうか」と勝手に自分で自分の首を絞めている節があります……。

また、一緒に企画を作り上げていくということではなく、指導する立場として何ができるのだろうか、ということ意識するようになりました。感覚で生きてきた人間（あのグラフではPlanが壊滅的）なので、今まで研修などで「このワーク楽しい〜！」と思うだけで終わっていたのですが、最近は「楽しかったから園田の子たちにも体験してもらいたいけど、あのワークの意図は何だったのだろうか」「あのワークをやることで何が学べるのだろうか」ということを考えながら勤務しています。

とはいえ、話し合っているうちについつい楽しくなり、私もメンバーの一員として発言してしまっ「楽しそうということだけで押し進めてしまった……」とあとで反省することが多いです。ただ、感覚人間なのはもうどうしようもないので、みんなが行き詰まっていたら楽しそうなことを提案して、そこからどうするかは学生次第、その中で困ったことがあれば話を聞いてあげればいいし、話し合いがさくさく進んでいるようなら何か問題点がないか確認するというスタイルでいいや、と思えるようになりました。そんな柔軟な対応ができるかどうかは別ですが……。

園田の学生たちは本当にみんなできる人たちですし、私が介入しなくてもよいのではと思うときもあります。ただ、今は四回生がしっかりしすぎていて、下級生に諸々のスキルが受け継がれていないという段階です。何をすればいいかわからない学生が多く、仕事を振っても「私はできない」と言う学生もいて、なんだか昔の私を見ているようで思わず抱きしめたくります(笑)

高校時代の友人に「今TAとしてこんなことをしている」という話をすると、「めんどくさそう」「大変やね」と言われることが多いのですが、私は面倒だなんて一切思ったことがないし、むしろ楽しく勤務しています。で

も、昔の私なら「めんどくさい」「失敗しそうで出来ればやりたくない」と思っていたと思います。今は「できない」と思っている学生にも、「あなたはこんなことが出来るんだよ」「向いていないと思っても、実は向いていると思われているかもしれないんだよ」ということに気がついてもらえる機会を提供したいです。素晴らしい活動をしているとアクティブ・ラーニング業界でいつか噂になればいいなあ、園田の学生FD委員の発展に貢献できたらいいなあ、と思いつつこれからも勤務したいと思えます。

以下は園田学園女子大学学生FD委員会での提案を契機に始まった関西大学のLAとの研修交流に今年度参加した学生の感想です。

園田学園女子大学LA研修活動報告および感想

関西大学LA 政策創造学部
2年生 重山 航哉

・活動内容：アイスブレイク(じゃんけん列車)・ワーク1(ギャップの王様)・ワーク2(部屋の間取りゲーム)・ワーク3(コンセンサスゲーム)

振り返り

・各ワーク感想：会場は図書館の近くのスペースで、飲み物とお菓子が用意されており、開始から和やかな空気であった。じゃんけん列車のように体を動かすアイスブレイク自体新鮮で、今後活用できるのではないだろうか。

1つ目のワークは紙に自身の特徴や強みを数個書き、チームメイトの関心が高いものについて話すという内容で、どちらかというとワークというよりアイスブレイクに近い印象を受けた。また、本人が話せるトピックは数個のうち1つ2つなので、残りのトピックも活かせればなお良いのではないかと感じた。

2つ目のワークは、チームのうち1人が部屋の間取りを書かれた紙を持ち、仕切りの向かいから声だけで指示を出すという内容であった。2チームがそれぞれ違う部屋の間取りを書いていたことが気になった。

3つ目のコンセンサスゲームでは、無人島に持っていくものの順位づけを行った。共有の時間が設けられており、意見の共有がしっかりと行なわれていた。模範解答のあるテーマならばより競技性が高く白熱したワークを作れると思う。

・総評「LA研修」という名前の活動であったが、「LAによる研修」なのか「LA同士が力を磨くための研修」なのかの区別がつかなかった。より授業に介入することなどに関してより深く突き詰めたテーマのワークがあっても良いのではないだろうか。また、全体を通して準備から片付けまで全て学生が行っており、職員の方は後ろで見守っているだけという形式は関西大学のものと通じるところがあると感じた。園田学園女子大学のLAも2回生の人数が多く、関西大学と状況が似ており、自分たちには思いつかないワークも今回の研修の中にあっただけで、合同でLA研修やワークショップを開催する機会が欲しいと感じた。

関西大学LA 法学部
2年生 井上 宗知

園田学園女子大学へ出張LAで感じたこと。

園田学園へ出張LAをしてきました。園田LAの皆さんから次の世代への育成の協力をしてほしいということで初めて園田学園大学を訪れました。

また今回は関大LAと園田LAの交流も兼ねていたので、研修内容も今まで共にしてきたワークをもとに作っていただきました。園田学園へは私と松田さんと重山くんで行きました。ワークを終えてから、

私たち関大LAからのコメントをお願いされたので、松田さん、重山くん、私の順番でコメントしました。

私は、丁度園田へ出張LAをする前にLA合宿の作り手をしたことを話しました。今回の合同研修の作り手をしてくださった園田LAがどういうイメージをもってやっていたのか、気持ちがとてもわかりました。例えば部屋の見取り図を書くワークではヒントを出すタイミングや答え合わせの時間を決めていたと思いますが、ヒントを早くに出してしまったり、ワーク時間の延長などで時間を使ってしまったこと。なかなかイメージ通りにはいかない、時間が足りなくなってしまった、などワークの作り手をしているとこのようなことが起きてしまいます。しかし、それは私たち関大LAでも同じことです。私たちもLeaning Cafeの作り手をしているときに時間配分や準備等でイメージ通りにいかないこともあります。特に私は今年は初めてのLA合宿で作り手をしワークの準備や作り手同士の話し合い不足など、反省するべきところがありました。

しかし、反省があるのは次に繋げることができると私は考えています。失敗は成功のもとという言葉があるように、次へ次へと繋げていくことが一番大事ではないかと思えます。また、万が一のことを考えて先のことを予測していくことも大事で、この事は私にも共通に言えることです。私たちは今回園田LAの次の世代への育成協力をお願いされましたが、私たち関大LAもまだ育成するという立場にはたてないと思えました。私たちも園田LAのみなさんからグループワークの際の動き方やグループメンバーへの干渉の仕方など学ばせていただきたいことがたくさんあることを、合同研修で私は特に感じました。

私は、私たち関大LAと園田LAの皆さんとはお互い協力しあい、共にLAとして高め合える仲間同士でありたいと考えています。今回の合同研修をきっかけにこれから関大LAと園田LAが一緒に参加し、意見や価値観、あなたにとってのLA観とは？を共有できる場所を作っていきたいと思えました。